

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	中里 理子 【論文博士】	要 旨
論 文 題 目	明治・大正期の小説作品に見るオノマトペの語義変化とその要因 ―和語と漢語の関わりを中心に―	<p>本論文は、明治・大正期の小説作品にみられるオノマトペ（擬音語・擬態語）を対象に、語義変化の実態とその変化の要因を明らかにしたものである。</p> <p>従来のオノマトペ研究は、音韻・形態・統語面の研究が中心となっており、最近、ようやく、認知言語学の意味分析を援用する研究などが出てきたところである。本研究はそれらのいずれとも一線を画しており、小説文章の近代化に伴って明治後期から起きたオノマトペの語義変化について、その実態と要因をつきとめようとしたユニークな研究である点が高く評価された。</p> <p>第一回審査会では、各章・各節の関係を明確にし、終章で論文の意義と全体の概要を記述することで論文全体の統一性を図ること、図表を、調査対象の経年的配列等に留意したうえで見やすく整理すること、「漢語系オノマトペ」「オノマトペ的感覚」等いくつかの語句に対する説明が不十分であること、などの指摘がなされた。</p> <p>第二回審査会は、事前に送付された修正版が上記の修正要求をほぼすべて満たしていたため、メール会議をもち、そのまま最終審査に進んで良いのではないかと提案がなされて、審査委員全員がこれに賛成した。</p> <p>パワーポイントによる公開発表では、図や箇条書きなどで簡潔に表現し、語義変化が周辺語彙との関わりで起きたことの立証、及びそれらに共通する語義変化の2つの要因の指摘にしばって発表するなどの工夫がみられ、経時的通時的観点から複雑を極めた研究内容をよく整理して見せていた。会場からの質問には適切な答えがなされ、発表者が研究内容についてよく把握していることを示していた。</p> <p>最終審査会では、文章の近代化に伴い、曖昧で多義であった和語のオノマトペが、漢語との張り合いという緊張関係の中で、正確で細密な描写にふさわしく、周辺の語と明確に区別される限定された語義へと変化したプロセスを明らかにした点を高く評価し、本論文を博士（人文科学）Ph.D.in Linguistics の学位授与に値するものと判断して、合格とした。</p>
審 査 委 員	(主査) 高崎みどり 教授	
	佐々木泰子 教授	
	大塚常樹 教授	
	伊藤さとみ 准教授	
	野口徹 准教授	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（ 可 ・ ☒ ）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <div style="border-left: 2px solid black; border-right: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p>⑤. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p>エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> </div> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	

